



○「校歌」

BSSラジオ「嗚呼懐かしき我が校歌」で本校校歌が紹介されます。

放送日は11月16日の木曜日、時間は午後3時20分頃です。

ここ数年コロナ禍で校歌を歌えませんでした。福島県立富岡高校は校舎で歌うことが、ある1日を除き10年以上できていません。

コロナや大雨・大雪などにより幾度なくどの学校も臨時休校を余儀なくされてきました。本校も同じです。富岡高等学校のHPには

「本校は、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故の

影響により2017（平成29年）3月末をもって、しばらくの間休校することとなりました。」とあります。1日や数日間のことではなく、期間もわからない休校です。閉校ではありません。

国際・スポーツ科が設置されている富岡高校は、バドミントンの桃田選手をはじめ国内外で活躍するアスリートを輩出する高校として有名でした。しかし、2011年3月11日に発生した東日本大震災、そして津波などにより冷却装置が停止、核燃料が溶け落ちる「メルトダウン」が起き、水素爆発まで起きた原子力事故により、学校が警戒区域となり長い間学校に立ち入ることが許されていません。今年春、復興拠点に設定された当該地区の避難指示がようやく解除されました。

では、震災後から2017年までは休校ではなかったのか。実は、震災の起きた2011年度は県内4高校及び静岡県の1高校にサテライト校が設置され、その5校のいずれかに生徒は通学しました。その後も同じような状況、つまり複数の他校の校舎を間借りする状況続きました。

HPにある休校前の最後の年の校長あいさつには「全校生が分かれて学習する状態は平常時とは異質の状況ではありますが、“富高はひとつ”を合言葉とし、年2回の集いを通して帰属意識の醸成と連帯感を高めることに努めております…」とあります。

先月震災当時の青木校長先生のお話を聞く機会がありました。その際今の富岡高校の写真を見せられて愕然としました。書きかけのノートや飲みかけのジュースが置かれたままの机などが散乱する教室、グラウンドに転がる朽ちかけの野球ボール…そこには2011年3月11日の昼すぎまでは学校に日常があった証とも言えます。青木元校長先生は、2015年の夏から校歌を定期的に校舎前で歌い続ける活動をされています。「震災前、この場所で普通の学校生活を送られていた。その記憶を忘れないためにも、学校が再開するその日まで歌い続けていく」と固く誓ったそうです。

その契機となった夏、校舎の片付けをするため震災時の生徒たちが一時的に校内に立ち入った際、最初は数人だったのが次第に広がり、いつしか校歌の大合唱が校舎に響いたそうです。今生きていることに意味があり、必ず明日につながると思うことが大事だと話しておられました。

震災から約1年後に、警戒区域の入り口付近まで行ったことがあります。近くのコンビニの入口には、原発作業員の方が入店する際の注意事項が大きく貼られていました。空き家となった住宅では、窓が割れているのかカーテンが風で揺らいでいました。非日常がそこにありました。

多くの生徒にとって高校は、はじめて自分で選び入試を経て手に入れた場所です。その高校で校歌をみんなで、学校で歌えることに感謝し、学校生活を全力で送って欲しいと思っています。

校歌	
作詞	諏訪秀富
作曲	米山道雄
一、朝のめぐみ 創造の 自然の論し 今新た 山脈はるか 翔ぶ鳥に 若き生命の 躍るかな いびや 進まんともがらよ	